

第3回琵琶湖オオクチバス等防除モデル事業調査 検討会 議事要旨

日時：平成19年3月7日(水) 13:30~16:00

場所：滋賀県農業教育情報センター - 4F 第5研修室

出席者：細谷委員(座長)、久保委員、高橋委員、中井委員、西野委員、松岡委員

国土交通省琵琶湖河川事務所河川環境課(西村建設専門官)、滋賀県自然環境保全課(亀甲主任技師)、滋賀県水産課(山本主任技師)、滋賀県水産試験場(田中主任主査、井出主査)

事務局：環境省、(財)琵琶湖・淀川水質保全機構

議事内容：

座長あいさつ

- 琵琶湖におけるモデル事業として、平成20年度にまとめるにあたり、次年度が調査の核になるので平成19年度計画を中心に議論していきたい。

資料 - 2、3(平成18年度冬季調査結果および追加検討結果)について

- 蜻蛉調査のうち、彦根旧港湾において環境条件として水草の繁茂状況が調査されていないが、総門川河口に水草がないのであれば、そういった構造が温水を捕捉するようなことが相当きいているのではという印象を受ける。
- 彦根旧港湾には蜻蛉集しており、絶対温度では説明がつかない。パラメータを広げて、特に水草について、例えばトランセクトで音探を走らせれば、水草の丈くらいなら機械的にわかるのではないか。
- 冬季蜻蛉集について、野田沼で冬にブルーギル成魚が多く捕獲された。琵琶湖全体を見たときに、外来魚が冬にどこにいるかは重要である。例えば北湖東岸の琵琶湖ではとても冬越しが大変な状況だと思うが、内湖がレフュージアになっているのではないか。
- 曾根沼内での話だが小さい水路が流れ込んでおり、そこにブルーギルの当歳魚が蜻蛉集していることがある。しかし水温差は1程度高い程度であり、全く集まらない年もあり、原因は不明である。
- 平成17年の冬は寒く、今年は暖冬であった。また、昨年7月中下旬の大雨出水がありブルーギルの繁殖に影響した可能性があり、前年に比べブルーギルの成長が悪い。これらのことから在来魚にとってよい気象条件だったといえるのではないか。この冬の調査結果で在来魚が多いからといって来年どうなるかはわからない。気候変動を視野にいれた計画を立てる必要がある。
- 野田沼、琵琶湖、さらに周辺水路にまで視野を広げなければいけないのではないか。もしかすると内湖が冷たく水路が暖かければそちらに行く可能性はある。
- 在来魚の繁殖場として内湖を見てきたが、周辺水路からみてもレフュージアとしての機能が回復してきたと言えるのではないか。また、モツゴはそれほどメリハリのある移動をしないので、内湖機能の指標とできるのではないか。

資料 - 4 (平成 19 年度事業内容(案))について

- ・ 稚魚調査について、調査結果より平成 18 年はほとんどバスギルが繁殖できなかったという効果が歴然とみられており、評価できている。ここで方法を変えるのは賢明でない。仔稚魚調査について方法を変えると過去との比較がさらにできなくなる。予算の都合もあろうが継続すべき。
- ・ 野田沼ではオオクチバスはあまり繁殖していないようだが、どのように再生産しているのかが不明のままである。オオクチバスの再生産の問題を解決しないと、ブルーギルが減ったからオオクチバスが増えた、といった話になりかねないのではないかと。人工産卵床は駆除以外にモニタリングの意味もある。調査頻度をたとえば週 1 回と縮小してでも継続すべきではないか。
- ・ 集魚灯について、実験室で十分な検討を事前に行うべきだろう。
- ・ 各地のモデル事業では南北や地域特性などが違うが、なぜ内湖なのかというのは、在来魚の重要な繁殖場であるためであり、琵琶湖水系という見方をすれば移動は大きなファクターである。移動調査は実施すべきである。一方、冬季蝸集は優先順位が低いかもしれない。
- ・ 平成 20 年度にとりまとめるとなると、平成 19 年度はポイントになる年だろう。1 つ 1 つの実施内容についてそれぞれ評価が必要になるのではないかと。
- ・ 次年度の実施項目については、優先順位をつけて、まず移動調査はぜひメインとして行いたい。人工産卵床は内容を見直して継続、仔稚魚調査はそのまま継続したいと思う。集魚灯はやめることになるだろう。
- ・ 計画の詳細については、座長に一任することで各委員が了解。

その他

- ・ 野田沼自体は我々のものではないが、防除調査を実施中であることから、可能な限り環境改変や放流等を行わないでいただきたい。野田沼において何か調査や放流等を実施するのであれば、環境省にご一報をいただくようお願いする。

以上

(文責：近畿地方環境事務所)